

中日新聞 × 静岡新聞 × 静岡文化芸大 連携講座



新聞生活に取り入れて

中日新聞社と静岡新聞社との連携講座が16日、静岡文化芸術大（浜松市中央区中央）であり、両編集局長のトークセッションが3年ぶりに開かれた。中日新聞東海本社の池田千晶編集局長と静岡新聞社の石川善太郎編集局長が、学生約30人に向けて、新聞の役割やこれからについて語った。

（柳昂介）

池田局長は、インターネット上では関心のある情報ばかりに触れてしまうが、新聞は事件事故や政治、スポーツなど幅広く話題が載っているとし、「新聞は情報の偏食が起きない、バランスの良い健康食のようなもの。生活にうまく取り入れてほしい」と呼びかけた。

石川局長は、時代の変化に対応し、スマートフォンアプリやウェブ向けの記事発信にも力を入れていると紹介しつつ、「地方紙本来の姿をなおざりにせず、地域の人の声に耳を傾け、記事を発信するという基盤を大切にしたい」と話した。

学生を前に話す、中日新聞東海本社の池田千晶編集局長と静岡新聞社の石川善太郎編集局長。浜松市中央区の静岡文化芸術大で

両紙編集局長と学生30人 討論

加藤裕治教授や学生からは「デジタルとの関わり」「紙で発行する意義」「取材方法の変化」などさまざまな質問が飛んだ。

池田局長は、購読者向けだけでなく、経済に特化した情報サイト、地方自治体と連携したデジタルサービスにも取り組んでいると紹介した。一方で「新聞を必要としている人もいて、情報の一覽性の観点からも、紙の新聞はまだ必要である」と述べた。

石川局長は「若い世代の記者は、情報収集や人とのつながりなどにうまくネットを使っている」と語った。新聞紙面については「タブロイド判を発行したり、記事を横組みにしたり、見せ方をいろいろ試している」と説明した。

連携講座は4～7月に全15回開催している。両社の記者や社員らが、報道現場やビジネスモデルなどを解説し、学生と意見を交わしている。